

別記様式 4



プラン名

大山ブロッコリー・スイートコーン産地の生産構造改革プラン



平成30年3月

目 次

1	プラン策定主体名	1 P
2	プラン名	1 P
3	対象地区	1 P
4	対象地区の現状と課題	1 P～1 7 P
5	計画概要	1 8 P
6	計画の具体的内容	1 8 P～2 4 P
7	プランの実施体制（フロー図）	2 5 P
8	プラン策定検討委員会構成メンバー	2 6 P
9	支援事業の内容	2 7 P
10	関連事業	2 7 P
11	過去3年間に実施した国、県の補助事業	2 7 P
12	今後の「大山ブロッコリー・スイートコーン産地」発展に向けて	2 7 P

- 1 プラン策定主体名 大山町
- 2 プラン名 大山ブロッコリー・スイートコーン産地の生産構造改革プラン
- 3 対象地区 大山町全域

4 対象地区の現状と課題

(1) 大山町農業の現状について

大山町においては、農業各部門の高齢化等課題による生産者の減少、これと比例した様々な特産物等の生産量、出荷量の減少が重要な課題であり、このような状況の中、農家からの意見を聞き取り農業振興事業に取組み、課題解決に向けた検討を重ねている状況です。

具体的には、平成24年に鳥取西部農業協同組合（以下、「JA鳥取西部」という。）が策定した『2大特産野菜の産地力増強プラン（広域取組）』に基づき、平成25年度から平成29年度（進行中）に、「がんばる地域プラン事業」でハード整備事業を中心に行い、主に「白ねぎの面積拡大」と「大山ブロッコリーの反収向上」を図るとともに、大山ブロッコリー井戸端会議の活動支援により、「大山ブロッコリー」の販売体制強化・消費宣伝活動・産地強化に取り組んで参りました。

白ねぎの作付面積は平成24年頃から増加傾向に転じ、平成28年には平成24年に比して5.1ha、出荷量も8,000ケースの増となりました。大山ブロッコリーも平成27年には面積・販売額とも過去最大となり、反収も目標に迫るものとなりました。また、町内では販売額1,000万円を超える経営体がブロッコリー栽培農家の26%に達する状況となりました。平成28年の初夏どりでは販売額も過去最高の3億6千万円となり、年度目標である販売額13億3千万円に向けて順調なスタートを切ることができましたが、その後9月の台風や長雨により甚大な被害を受け、反収は113ケースに止まりました。現在、普及所等の指導を元に、行政、農協等各関係機関が連携を取り、産地一丸となって湿害対策等の災害に強い産地づくりに取り組んでいるところです。

ア) 『2大特産野菜の産地力増強プラン』の取組み実績

生産力向上対策では、市場への安定供給と供給量の確保、高品質で一定水準の規格品出荷へ向けた取組み、反収向上へ向けた技術向上対策として、排水対策の実証・散水設備の整備、減化学肥料栽培の推進による堆肥投入・耕畜連携の促進、白ねぎの共選場の整備等を実施しました。白ねぎ栽培においては、根切り・葉剥ぎ等の調整作業が全労働時間の約61%を占め、これまで、高齢農家や規模拡大志向農家にとって、大きな負担となっていました。これを克服するため、共同選果場を整備し、利用を希望する農家の負担を軽減することができ、平成28年においては販売額も2億9千万円となり、大山町の特産野菜ではブロッコリーに次ぐ品目となりました。

人的体制の強化では、機械設備の整備、栽培指導と経営指導、規模拡大希望者への農地集積とマッチング、青年部組織の育成等を実施しました。

また、周年販売力の強化では主力市場への消費宣伝強化、食農教育によるPR活動、消費者とのふれあい交流、特別栽培の促進（大山ブロッコリー：きらきらみどり）、マスコットキャラクターの活用（大山ブロッコリー：ロッコとリーブ）、地域団体登録商標（大山ブロッコリー）の取得等を実施するなど、それぞれの課題に対応した取組みを行うことができました。

※『2大特産野菜の産地力増強プラン』の目標達成状況

			H24	H25	H26	H27	H28	H29(見込)
白ねぎ	面積 (ha)	目標	-	-	-	-	-	36.9
		実績	28.6	30.6	32.2	33.3	33.7	(34.6)
	新規就農者 (人)	目標	1	4	4	4	4	4
		実績	4	4	5	3	0	(2)
大山 ブロッコリー	反収 (CS/10a)	目標	-	-	-	-	-	155
		実績	139	139	139	144	113	(160)
	新規就農者 (人)	目標	2	3	3	4	4	4
		実績	2	2	2	2	4	(6)
作業受託組織 の育成(累計)	受託組織 (組織)	目標	-	-	-	-	-	4
		実績	0	0	1	1	2	(2)

イ) 大山町の農業施策

本町における農業施策として、地域の抱える担い手や農地の問題を地域で話し合いながら解決していく「人・農地プラン」策定の推進と、農地集積・集約化を図るため「農地中間管理事業」に積極的に取り組んでいます。平成28年からは人・農地問題チーム会議と題して毎月、JA鳥取西部・西部農林局・鳥取県農業農村担い手育成機構（以下「担い手育成機構」）等の関係機関で集い、お互い情報共有しながら事業推進をしております。その他にも大山町独自のアグリマイスター制度の創設による農業研修生の受入れや、地域おこし協力隊（定住・農業部門）の活用により、地域特産品の新たな担い手確保に取り組んでおります。また、恒常的な労働力不足を補い地域農業を発展させるため、農業分野における外国人労働力活用特区の提案も進めているところです。

(2) 大山ブロッコリーの新たな課題について

ア) 収穫作業の負担

大山ブロッコリーは生産組織や個人による機械等の導入により、生産性向上のための素地が整備され、産地全体の栽培面積は右肩上がりに伸びてきました。一方で、毎年のように新規就農者や新規栽培者はあるものの、高齢化が加速し、特に重労働となる夜通しの辛い収穫作業等の負担により、高齢農家のリタイアや規模縮小さらに中核農家が規模拡大を図る上での隘路になってきました。

そうした中、収穫、出荷調整作業を請け負う商系業者の進出は、JA鳥取西部にとって産地を揺るがす大きな問題となっています。平成29年の初夏どりブロッコリーの販売額は3億6千万円と、順調に進めば年間13億6千万円突破も可能な状況にありましたが、現状としては系統外への流出に歯止めを掛けることができず、反収面では目標の155ケースに達したにも関わらず、大山営農センター管内の出荷量は176,000ケース（目標対比93.0%）に止まるという状況となっています。これはまさに現在、農家が求めている収穫作業における負担軽減策の一つの受け皿が出現したことを示すものであります。しかし一方で、これまで関係者が一体となって作り上げた「大山ブロッコリー」というブランド力の低下と、生産部組織の弱体化等に繋がるのではないかと心配も抱えております。

イ) プロジェクトチームの発足

高齢化の進展等による産地縮小、商系業者の進出による「大山ブロッコリー」ブランド力の低下といった新たな課題を契機に、系統出荷量の回復や担い手の確保・育成等について、生産者自らが考える必要があるとの声が上がリ、急遽JA鳥取西部では生産者役員が協議を行い、今後の産地としての

方向性を話し合う場を設ける運びとなりました。これに生産者代表・西部農林局・担い手育成機構・大山町等の各関係者が参集し、今後については「産地力増強」から「強い経営体づくり」に移行させる産地ビジョンを明確にし、課題解決と活性化策を推進するためのプロジェクトチームを発足したところです。

(3) 新規振興品目（スイートコーン）について

ア) ブロッコリーとスイートコーンの組合せ

町の新たな特産野菜として注目しているのがスイートコーンです。スイートコーンは初夏どりブロッコリー（5～6月）の後に収穫可能（7月）で、ブロッコリーの所得が無い時期に収入が得られるメリットがあります。更に、スイートコーンは深根性があり土壌の物理性の改善が見込まれる上に、吸肥力が強く、土壌養分のバランス調整に適しています。また、後に作付ける秋冬ブロッコリーの緑肥としての効果も期待できることから、ブロッコリーの端境期を埋める品目として再認識されてきたところです。加えて、スイートコーンで使用する機械はブロッコリー栽培とほぼ共通しており、新規導入の際の資本投入が不要で、安定的な経営をする上でも大きなメリットとなります。このため、ブロッコリーの課題解決に向けた取組みを検討する上でも外せない品目となっております。

平成29年3月には鳥取西部農協管内の生産者が集まり、鳥取西部農協スイートコーン部会が設立され、大山町スイートコーン部もこれに加わり再出発したところです。平成28年の町内スイートコーン生産農家数は41戸と前年対比124%、栽培面積も14.3haと前年対比155%となっており、規模拡大者や新規参入者が急激に増えているところです。市場評価も高く、今後更なる作付面積の増加が期待される栽培品目となっております。

<大山町ブロッコリー産地の現状>

○ブロッコリー栽培の歩みと経緯

昭和46年	大山町中山地区（旧中山町）で水田転作作物として初めて導入された。
昭和60年代	作付面積は順調に増え、秋冬どりに加えて初夏どりも導入、周年供給体制を実現し、当時の中山町農協は“西日本一の産地”となった。
平成2年	県内で販売金額が10億円となる。
平成4年頃	面積増の中で、高温多雨による品質低下、連作障害や病害虫の発生、米国産輸入増により、価格が大幅に下落。
平成6年	8月に農協合併でJA鳥取西部が誕生、全国に先駆けて葉付き出荷を行い、JA鳥取西部産ブロッコリーの鮮度の高さをアピールした。
平成7年	連作障害、輸入増並びに白ねぎへの品目転換による面積減少により、過去最低の販売額となる。
平成12年	予冷設備の整備や集出荷の一元化、セル育苗による定植作業の機械化を推進し、一戸当たり面積が大幅に増加。
平成20年	原油高騰による資材等の高騰、金融危機からなる企業業績など厳しい状況の中で販売高10億円を達成。
平成21年	国内の作付面積が前年の2割増となる。暖秋と豊作基調により各産地が前進出荷となり過剰供給と経済不況により価格低迷が長期化。他産地と差別化を図る産地形成が急務となる。
平成22年	大山ブロッコリー井戸端会議が発足。3つの柱（産地強化、販売体制強化、消費宣伝強化）でブランド強化を図り、消費地から求められる産地確立に向け動き出す。

平成 23 年	未曾有の度重なる気象災害の発生。10 月にブロッコリー産地再生緊急支援事業が創設され、被害圃場の再定植により被害軽減がなされた。
平成 24 年	大山ブロッコリー地域団体商標登録（ブロッコリーでは全国初めての登録）。
平成 25 年	がんばる地域プラン事業『2 大特産野菜の産地力増強プラン』がスタート。
平成 27 年	産地間競争の激化、異常気象等依然厳しい環境にある中、関係機関と連携し継続した様々な取組が実を結び、過去最高 14 億円を突破する。
平成 28 年	初夏どりブロッコリーで初めての 4 億円突破となるが、9 月に台風・長雨による過去最悪の被害を受け（被害総額 3 億円超）、2 度目の産地再生緊急支援事業が適用される。

○栽培面積、出荷数量、農家戸数等推移

年度	H25	H26	H27	H28	H29 (見込み)	備考
面積 (ha)	405.1	414.8	425.0	410.7	417.0	
出荷数量(6kg/CS)	597,789	639,014	635,821	462,528	646,000	
反収 (CS)	139	139	144	113	155	
農家戸数(戸)	190	188	189	178	174	
販売金額 (千円)	1,164,560	1,086,136	1,300,271	1,013,162	1,292,000	
平均単価(円/CS)	1,948	1,700	2,045	2,370	2,000	

<大山町スイートコーン産地の現状>

○スイートコーン栽培の歩みと経緯

昭和 57 年	中山町農協スイートコーン部発足
平成 21 年	ブロッコリー栽培技術を用いたセル育苗技術が確立し、名和・大山地区でも栽培がスタート
平成 22 年	名和・大山地区での産地振興を図るため、部会組織の範囲を大山町全域に拡大 大山町スイートコーン部を発足
平成 26 年	名和・大山地区若手ブロッコリー生産者の参入により面積が増加傾向となる。
平成 29 年	更なる産地強化を図る為、鳥取西部農協スイートコーン部会を設立。

○栽培面積、出荷数量、農家戸数等推移

年度	H25	H26	H27	H28	H29 (見込み)	備考
面積 (ha)	5.02	6.46	9.22	14.3	12.3	
出荷数量(5kg/CS)	7,869	12,360	20,091	23,742	25,760	
反収 (CS)	157	191	218	166	209	
農家戸数(戸)	30	29	33	41	38	
販売金額 (千円)	9,741	13,230	26,815	29,128	30,598	
平均単価(円/CS)	1,238	1,070	1,335	1,227	1,188	

(4) これまでの検討経過について

平成29年5月から検討してきた経過については下記の表のとおりです。

日時	検討会等	内容等
5月1日	生産部打合会	J A鳥取西部ブロックリー部会運営委員会でのプロジェクト検討。
5月8日	担当者打合会	J A鳥取西部より町へプロジェクトの打診あり。
6月21日	第1回P T会議	2大特産野菜プランを踏まえた新プランの検討。安定した労働力として、外国人労働者の特区活用について検討。ブロックリーとスイートコーンの複合経営を柱とすることを決定。
7月13日	第2回P T会議	町内の経営モデルの検討。生産者の意見把握のためアンケート調査の実施を決定。
7月19日 ～7月27日	アンケート実施	
8月1日	担当者打合会	アンケート集計作業。
8月9日	担当者打合会	アンケート集計作業、集計結果の検討。計画概要・具体的取組みの検討。
8月10日	第3回P T会議	アンケート集計結果の検討（階層別集計の指示あり）。基本計画書のイメージ確認（系統外出荷の状況調査の指示あり）。
8月16日	担当者打合会	アンケートの階層別集計作業。2大特産野菜プランの実績検証。
8月18日	担当者打合会	基本計画（案）の作成。アンケート階層別集計結果のグラフ化。
8月22日	担当者打合会 第4回P T会議	基本計画（案）の提示。機械導入と受託組織立上げについて検討。中間管理事業の活用を検討。
8月25日	担当者打合会	アンケートの再集計作業。基本計画（案）の修正作業。
8月28日	担当者打合会	基本計画（案）の修正作業。
8月29日	担当者打合会 第5回P T会議	外国人労働力活用特区の説明。機械導入のあり方について検討。経営継承モデルについて検討。
8月31日	基本計画書提出	
9月5日	担当者打合会	基本計画審査会用の資料検討。支援事業内容の検討（機械導入のあり方について最終確認）。
9月14日	担当者打合会	プラン実施体制、支援事業内容の検討。
9月20日	担当者打合会	基本計画審査会に向けたプレゼン資料の検討。市場評価の確認。
9月29日	第6回P T会議	基本計画審査会に向けたプレゼン資料の確認。説明者の人選。
10月10日	担当者打合会	プレゼン資料の修正作業。気象災害発生状況の確認。
10月12日	第7回P T会議	プレゼン資料の検討（構成の見直し指示あり）。生産者説明について検討。
10月18日	担当者打合会	プレゼン資料の修正作業。
10月19日	担当者打合会	説明者によるリハーサル実施。プレゼン資料の修正作業。
10月23日	第8回P T会議	プレゼン資料の確認。リハーサル実施。
10月26日	基本計画審査会	
11月21日	担当者打合会	本プラン（案）の修正検討（経営改善に係る取組検討）。支援事業内容の検討（事業費配分）。
11月21日	農業委員会事務局との打合会	プラン推進にあたり農業委員、農地利用最適化推進委員への協力要請について、事務局と調整。
11月30日	第9回P T会議	基本計画審査会結果の検討。本プラン（案）の提示、検討。
12月4日	担当者打合会	本プラン（案）の修正検討。生産者説明会の内容検討。
12月7日	生産者説明会	基本計画採択にあたり生産者への概要説明、意見交換。（37名）
12月11日	生産者説明会	基本計画採択にあたり生産者への概要説明、意見交換。（13名）
12月11日	農業委員会説明会	プラン推進にあたり農業委員、農地利用最適化推進委員への説明、意見交換。（29名）
12月12日	担当者打合会 第10回P T会議	本プラン（案）の提示、検討。
12月13日	改良区説明会	プラン推進にあたり改良区事務局への説明、意見交換。（4名）
12月15日	本プラン提出	
12月15日	担当者打合会	本プラン審査会用の資料検討。
12月19日	担当者打合会	プレゼン資料の修正作業。
12月22日	第11回P T会議	説明者によるリハーサル実施。
12月25日	本プラン審査会	
12月27日	担当者打合会	本プラン再審査に向けた検討。課題抽出。
1月4日	担当者打合会	本プラン再審査に向けた検討。資料作成協議。
1月15日	担当者打合会	本プラン再審査に向けた検討。資料修正。視察研修（県内）打合せ。
1月16日	視察研修	冷蔵庫導入検討にあたり先行事例調査（琴浦町）を実施。（7名）
1月22日	担当者打合会	本プラン再審査に向けた検討。資料修正。視察研修（県外）打合せ。
1月29日	担当者打合会	本プラン再審査に向けた検討。本プラン構成協議。
1月31日	本プラン提出	
2月2日	第12回P T会議	本プラン・プレゼン資料の確認。事業実施に向けた課題協議。
2月6日	本プラン審査会	
3月14日	担当者打合会	本プラン提出に向けた検討、意見交換。
3月16日	本プラン提出	

(5) アンケートの実施と結果概要

本町にはブロッコリー、白ねぎ、スイートコーン、メロン、ストック、花壇苗等の生産部会がJA鳥取西部を事務局として存在し、生産性の向上、所得向上に向け日々積極的な取組みを展開されています。本町においても産地振興に必要な支援を協議・検討し、対応しているところです。

「白ねぎ」においては販売体系を含め、県下全体を視野に入れた振興策をJA鳥取西部が中心となり進めていきます。「メロン・ストック」はJAグループの農家所得アップ応援事業の活用により生産者支援が図られ、「花壇苗」は国の産地パワーアップ事業を活用してパイプハウスの増設を実施したところです。販売に係る輸送についても現在、県生産振興課を中心に整備を進めております。

こうした中、本年で最終年を迎えるJA鳥取西部の『2大特産野菜の産地力増強プラン』の実施で見えてきた新たな課題としてブロッコリー収穫作業等の負担があり、その解消策を含んだ産地ビジョンを策定するため、町内のブロッコリー部会員及びスイートコーン部会員を対象に課題把握のためのアンケートを実施することとしました。そこから聞こえる産地、生産者の声を整理し、今後の産地としての在り方と事業内容を検討し、「ブロッコリー・スイートコーン」を中心とした大山町でのプランを作成するものです。

なお、今後もより多くの生産者の意見を聞きながら、JA鳥取西部・西部農林局・担い手育成機構等各関係機関と連携し、支援体制を強固に確立する必要があると考えています。

*アンケート（平成29年7月実施）

ブロッコリー：100名回答/161名配布（回収率62%）

スイートコーン：29名回答/35名配布（回収率82%）

主な質問とその回答（抜粋）

	ブロッコリー	スイートコーン																												
① 農業後継者の有無は？	「いる」22名（22%） 「いない」41名（42%） 「分からない」35名（36%）	「いる」8名（30%） 「いない」9名（33%） 「分からない」10名（37%）																												
② 5年前、現在、5年後の経営面積、労働力は？	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>初夏</th> <th>秋冬</th> <th>人数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>5年前</td> <td>66.2ha</td> <td>156.7ha</td> <td>203人</td> </tr> <tr> <td>現在</td> <td>90.3ha</td> <td>219.1ha</td> <td>248人</td> </tr> <tr> <td>5年後</td> <td>98.3ha</td> <td>229.3ha</td> <td>227人</td> </tr> </tbody> </table>		初夏	秋冬	人数	5年前	66.2ha	156.7ha	203人	現在	90.3ha	219.1ha	248人	5年後	98.3ha	229.3ha	227人	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>面積</th> <th>人数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>5年前</td> <td>4.1ha</td> <td>42人</td> </tr> <tr> <td>現在</td> <td>10.4ha</td> <td>80人</td> </tr> <tr> <td>5年後</td> <td>11.5ha</td> <td>76人</td> </tr> </tbody> </table>		面積	人数	5年前	4.1ha	42人	現在	10.4ha	80人	5年後	11.5ha	76人
	初夏	秋冬	人数																											
5年前	66.2ha	156.7ha	203人																											
現在	90.3ha	219.1ha	248人																											
5年後	98.3ha	229.3ha	227人																											
	面積	人数																												
5年前	4.1ha	42人																												
現在	10.4ha	80人																												
5年後	11.5ha	76人																												
③ 規模拡大に必要なものは？	「労力の確保」26人、「機械等の整備」24人、「収穫支援」21人、「収穫時間の緩和」18人、「優良農地の確保」17人	「労力の確保」8人、「収穫支援」5人、「機械等の整備」「優良農地の確保」各4人、「出荷規格の見直し」3人																												
④ 面積を減らす、又はやめる理由は？	「作業がきつくなった」35人 「後継者がいない」21人 「働き手が足りない」14人	「作業がきつくなった」7人 「働き手が足りない」4人 「他作物を重点化するため」4人																												
⑤ 収穫はどのようにしているか？	「経営主+家族」57人（58%） 「経営主本人のみ」28人（28%） 「経営主+雇用」13人（13%）	「経営主+家族」14人（52%） 「経営主本人のみ」7人（26%） 「経営主+雇用」5人（19%）																												
⑥ 収穫支援が受けられる状況があれば利用するか？	「利用する」35人（37%） 「利用しない」30人（32%） 「分からない」29人（31%）	「利用しない」11人（44%） 「分からない」8人（32%） 「利用する」6人（24%）																												
⑦ 外国人労働者の雇用を活用するか？	「考えていない」79人（77%） 「農繁期雇用」9人（9%） 「常時雇用」7人（7%） 「季節雇用」7人（7%）	「考えていない」21人（72%） 「農繁期雇用」3人（10%） 「常時雇用」3人（10%） 「季節雇用」2人（7%）																												

	ブロッコリー	スイートコーン
⑧ 所得向上に向けてどうすればよいと思うか？	「反収向上、栽培管理徹底」66人、「経費節減の作業体系」55人、「販売力の強化」38人	「反収向上、栽培管理徹底」21人、「販売力の強化」16人、「経費節減の作業体系」14人
⑨ 活気ある産地にするためにはどうすればよいと思うか？	「系統としての団結力」47人、「新規栽培者を掘り起こす」45人、「販売促進等の活動」36人	「新規栽培者を掘り起こす」20人、「産地全体の面積拡大」14人、「販売促進等の活動」13人
⑩ 栽培の作業の中で最もつらい作業は何ですか？	「収穫」77名(44%)、「出荷調整」38人(22%)、「農薬散布」28人(16%)	「収穫」「出荷調整」各12名(31%)、「農薬散布」8人(21%)
⑪ 機械の共同利用または受託作業組織があれば利用したい作業は？ (する・検討したいの合計)	共同利用…耕盤破砕 25人、収穫 21人、冷蔵庫 19人 受託作業組織…堆肥散布 34人、収穫 31人、耕盤破砕 26人	共同利用…堆肥散布 7人、育苗 3人、収穫 3人 受託作業組織…堆肥散布 11人、収穫 8人、防除 5人
⑫ その他意見・要望	○災害対策の徹底。 ○発泡氷詰め出荷体制の整備。 ○直売ルート開拓。 ○共同選果場は絶対必要。	○調整時に先端の詰まり具合の見分け方を早くする方法。 ○M・S階級の一本化。 ○営農担当の人数を増やして各農家を回ってほしい。

【農家の声】

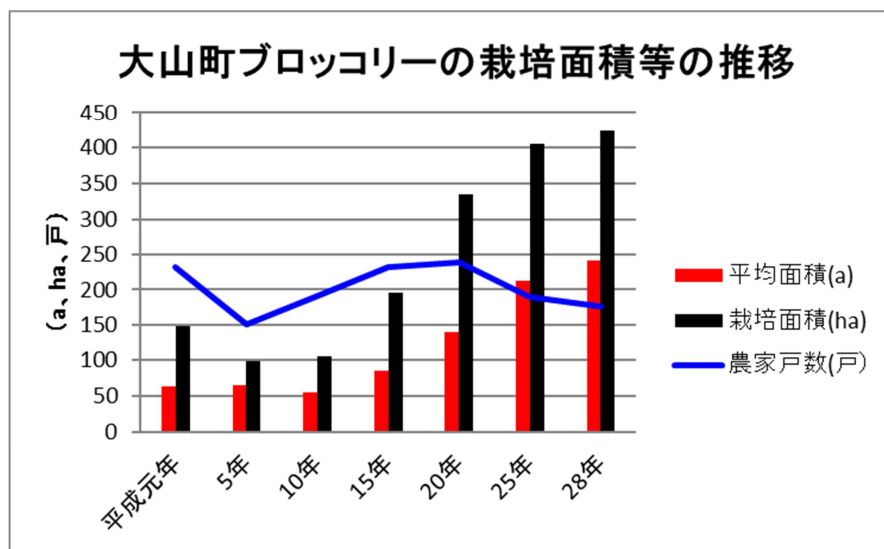
「息子はいるが、県外に出て会社勤めをしていて跡を継ぐ気はないようだ。
機械も農地もあるのに、県外者でもいいから誰か継いでくれる者はおらんだろうか？」

(6) アンケート結果等から見える現状

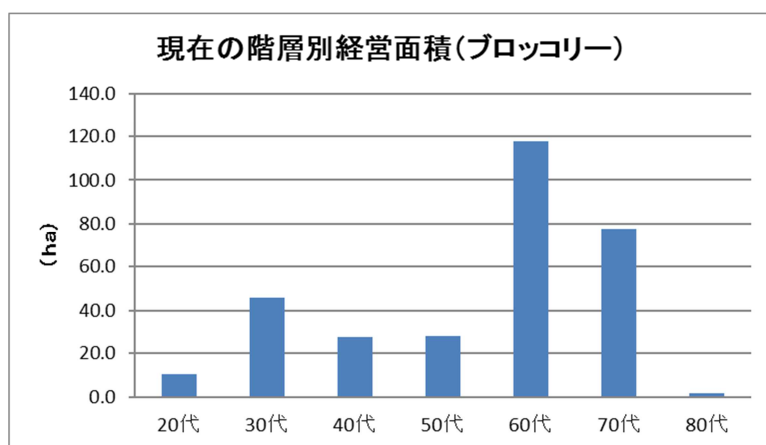
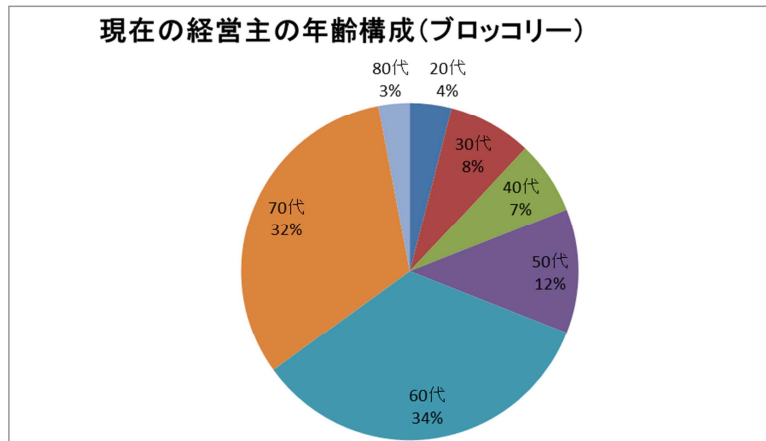
〈大山ブロッコリー〉

① ブロッコリーの栽培面積は右肩上がりに増加しており、アンケート結果から、今後も増加傾向は継続する状況にあります。しかし、農家戸数は平成20年以降、減少傾向にあり、一戸当たりの栽培面積は増加傾向です。

→ 少数のリタイヤでさえも、産地の縮小や不耕作地の発生が懸念される状況です。



② 現在、経営主のうち60～80代が全体の約70%を占め、全栽培面積の約65%を占めています。



③ アンケート結果から、5年後に増加させたいとする農家は30.0%で、減少させると答えた農家は44.0%、現状維持が26.0%でした。

